

梅根悟と教育史教育 —今『西洋教育史』をどう用いるか—

Umene Satoru and Teaching on History of Education —How to use “History of Education in Europe” now—

渡 邊 隆 信*
WATANABE Takanobu

梅根悟は日本の戦後教育界において、卓越した教育史研究者、教育実践指導者、大学経営者等として、他に類を見ない多面的な活動をおこなった。本稿では、教育史教育という視点から梅根の思想と活動について考察する。具体的には、彼が著した教育史教育のテキストである『西洋教育史』（初版1952（昭和27）、改訂版1963（昭和38））を取り上げ、その執筆経緯や内容を検討したうえで、彼が大学で実践した教育史教育の様子を紹介するとともに、教育史教育の意義についての考えを明らかにする。その作業を通して最後に、『西洋教育史』を今日大学での教育・研究で用いるとした場合の可能性として次のことを提言する。すなわち、『西洋教育史』の成立と改訂を、梅根の思想展開や戦後の教育制度と社会状況との関わりにおいて読み解く作業を通して、教育の理論と実践の関係、政治と教育の関係等について考察するための題材・資料にすることである。

キーワード：梅根悟、教育史教育、『西洋教育史』

Key words : Umene Satoru, teaching on history of education, “History of Education in Europe”

I. はじめに

「梅根の前に梅根なく、梅根の後にも梅根なし。」これは彼の恩師、篠原助市のことばとされるが¹、そのことば通り、梅根は戦後教育において、他に例を見ない多面的な活動をおこなった。梅根は学問研究者として、東京文理大学及び東京教育大学教授、和光大学学長の在職期間中、西洋教育史の卓越した著書論文を多数著すとともに、日本教育学会及び教育史学会会長、日本学術会議会員として教育学研究の指導的役割を果たした。こうした研究活動と同時に、梅根は教育改革者として、戦後、川口市助役として地域カリキュラムの編成に携わったのを皮切りに、コア・カリキュラム連盟（後の日本生活教育連盟）共同設立者（石山脩平、海後勝雄らと）、日教組「教育制度検討委員会」等の委員長として、戦後の教育制度と実践に対して積極的な提言をおこなった。また、大学経営においても、和光大学の初代学長として、大学の教育・研究の改善に手腕を発揮したことで知られる。

こうした活動の多面性のゆえに梅根の活動の体系的把握は容易ではない。そのことが—彼の薫陶を受けた研究者が数多く存在するなかで梅根という人物を研究対象にすることへの抵抗感を別にすれば—、これまで梅根研究の進展してこなかった理由の一つであると考えられる。2000年代以降、日本の戦後教育学を振り返り、再検討する動きがようやく本格化しているが²、梅根に関しては、

中野光と古沢常雄の研究を除けば学術論文は皆無に等しい³。

本稿では、教育史教育という視点から梅根の思想と活動について考察する。具体的には、彼が著した最初の教育史教育のテキストである『西洋教育史』（初版1952（昭和27）、改訂版1963（昭和38））を取り上げ、その執筆経緯や内容を検討したうえで、彼が大学で実践した教育史教育を紹介するとともに、教育史教育の意義についての考えを明らかにしたい。その作業を通して最後に、『西洋教育史』を今日大学での教育・研究で用いるとした場合に、どういった可能性があるか、若干の提言をおこないたい。

II. 『西洋教育史』執筆の経緯

第二次世界大戦後の大学改革により、1949（昭和24）年5月に新制大学が発足した。同年、教育職員免許法が制定され、免許主義の徹底が求められた。免許状がなければ教育職員になることができず、免許状授与の条件も厳格に規定された。原則として、一定の教職教養に関する科目を修めなければ何人も教育職員になれないことになった。同年11月、教育職員免法施行規則が制定され、履修基準の細目が提示された。「教育史」も教職専門科目の一つとして位置づけられた。

こうした教育法上の履修基準の設定を背景にして、い

*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻教育コミュニケーションコース

平成25年11月1日受理

くつもの出版社が教職教養の大学講義用テキストを企画・出版していった。主なものを挙げると、誠文堂新光社の「教職教養シリーズ」(1950(昭和25)年～)、金子書房の「教育大学講座」(1950(昭和25)年～)、岩崎書店の「教育全書シリーズ」(1953(昭和28)年～)、金子書房の「大学教職課程シリーズ」(1953(昭和28)年～)などがある。

梅根の『西洋教育史』は、誠文堂新光社の「教職教養シリーズ」に収められている。本シリーズは全16巻からなり、『西洋教育史』はその第8巻として刊行された。梅根は本書以外に、同シリーズにおいて『教育方法』、『中等教育原理』も単著として執筆している。梅根以外の同シリーズの編著者の顔ぶれを見てみると、石山修平編『教育原理』、中野佐三編『教育心理』、廣岡亮蔵『教育課程』、海後勝雄『初等教育原理』など、東京教育大学の教員が中心である。

ところで、誠文堂新光社は1912(明治45)年に創業され、農業書・科学書を専門にする出版社であった。1947(昭和22)年に梅根の出世作『新教育への道』を教育書として初めて出版したが、それは梅根の茨城師範学校附属小学校主事時代(1933(昭和8)～1936(昭和11))の同僚であった小松崎英雄の仲介によるものであった⁴。同社はその後、「教職教養シリーズ」のみならず、梅根の関わった雑誌『カリキュラム』(1949(昭和24)～1959(昭和34))や著書『中世ドイツ都市における公教育制度の成立過程』(1957(昭和32))、『西洋教育思想史1～3』(1968(昭和43)～1969(昭和44))等を手がけた。

Ⅲ. 研究歴における『西洋教育史』の位置

(1) 『西洋教育史』刊行前後の略歴

梅根は第二次世界大戦の終結を埼玉県川口中学校長(1941(昭和16)年～)として迎えた。その後、1946(昭和21)年7月に埼玉県川口市助役となり、翌年、助役を退職し、『新教育への道』を刊行した。それ以降の『西洋教育史』刊行前後の梅根の略歴をまとめると以下のようなになる⁵。

- 1948(昭和23) 東京文理科大学助教授
コア・カリキュラム連盟の結成に尽力、副委員長となる
- 1949(昭和24) 東京教育大学教授となり東京文理科大学教授を兼ねる
この頃から、コア・カリキュラム運動の力をセーブしつつ、年来心にかけてきた西洋教育史、とりわけ政策・制度史の研究に労力を向ける
- 1951(昭和26) 日教組教研集会講師
以降、日教組の教育研究運動に協力

- 1952(昭和27) 『西洋教育史』(教職教養シリーズ)刊行
- 1954(昭和29) 論文「中世ドイツ都市における公教育制度の成立過程」によって、東京文理科大学より文学博士の学位授与
- 1955(昭和30) 『世界教育史』刊行
- 1956(昭和31) 教育史学会創立、事務局長となる
- 1959(昭和34) 日本学術会議会員に立候補し当選
- 1960(昭和35) ソビエト、チェコスロバキアを視察
- 1962(昭和37) 東京教育大学学部長
『世界教育史大系』の構想を実現する目的で、世界教育史研究会を組織し、活動に入る
- 1963(昭和38) 『西洋教育史』(新・教職教養シリーズ)刊行
- 1966(昭和41) 和光大学創設、初代学長となる
- 1968(昭和43) 『西洋教育思想史1～3』刊行
～1969(昭和44)
- 1974(昭和49) 『世界教育史大系』(全40巻)刊行
～1978(昭和53)

(2) 教育史研究の時期区分

梅根の教育史研究の変遷は大きく4期に区分することができる。梅根は1966(昭和44)年に自身の研究歴を次のように振り返っている⁶。

第1期は、学生時代から東京文理科大学就職(1948(昭和23))までの「新教育思想史研究の時代」である。小倉師範学校学生の時に(1919(大正8)～1923(大正12))、新教育運動の洗礼を受けた梅根は、東京高等師範学校の学生(1923(大正12)～1927(昭和2))としてルソー研究を行う。岡山師範学校の教師時代(1927(昭和2)～1930(昭和5))に新教育運動に積極的な関心を示し、東京文理科大学の学生時代(1930(昭和5)～1933(昭和8))にルソー研究の深化と新教育思想の発展史の研究を進める。その後の学校遍歴(茨城師範学校附属小学校、埼玉師範学校附属小学校、埼玉県立本庄中学校長、埼玉県川口中学校長(1933(昭和8)～1946(昭和21))を経て、大戦後、新教育運動の推進とその思想史的研究を行う。この時期の代表的著作として、『新教育への道』(1947(昭和22))、『カリキュラム改造』(1949(昭和24))、『ヒューマニズムの教育思想』(1949(昭和24))がある。

第2期は東京文理科大学就職以降、「欧米の近代的教育制度の発展史を日本の教育制度の近代化の示唆とするためにという問題意識に促されて研究」する時期である。戦後の教育制度改革(六三制の誕生、教育委員会の発足、教育基本法の制定)を守り育てるために、こうした近代教育制度の欧米における発達の歴史を明らかにすることを目指した。この時期の代表的著作は、『西洋教育概説』

(1950 (昭和25))、学位論文「中世ドイツ都市における公教育制度の成立過程」(1954 (昭和29))を挙げることができる。

第3期は、1951 (昭和26)頃からのいわゆる「逆コース」以降の「日本の教育政策を批判する立場で書かれた比較教育史」の時期である。梅根はこの時期、保守的・反動的な教育政策と、それに対する反体制的教育運動のレジスタンスの歴史を近代国家に共通なものとして、とらえようとする。第1期、第2期の発達史的な比較教育史から、政策批判的な比較教育史へと転換していった時期である。代表的著作として『世界教育史』(1963 (昭和38))がある。

そして第4期は、『世界教育史』刊行以降の時期である。梅根は第3期の思想を推し進め、米・英・仏・独などゲルマン系の強国群(客体)を、歴史の主体が立ち向かう統一体としてとらえ、それを批判の対象とする。歴史の主体を世界の革新勢力(いまだ統一的主体を形成していないが)に求め、従来の「欧米中心の世界」観を批判し、「アジア、アフリカ」との連帯を志向し、しかもそれがアジア、アフリカや「欧米」諸国の平和を求める人々との新しい連帯につながるような教育史として日本人としての「世界教育史」を構想する^{*7}。代表的著作は、梅根が企画・編集の責任者を務めた『世界教育史大系』(全40巻)(1974 (昭和49)~1978 (昭和53))である。

以上のように梅根の教育史研究を4期に区分するとすれば、『西洋教育史』の初版(1952 (昭和27))は、第1期と第2期の特徴を併せ持った著作である。そして改訂版(1963 (昭和38))は、『世界教育史』と同年に出版されたものであり、第3期の問題関心から初版を大幅に加筆・修正した著作と言える。次節では初版と改訂版の内容を比較してみたい。

IV. 『西洋教育史』初版と改訂版の比較

(1) 課題

一般的な教職教養のテキストにありがちな基礎知識の紹介にとどまらず、『西洋教育史』では初版も改訂版も、日本の教育現実と結び付いた明確な課題意識に貫かれている。しかし、その課題意識は大きく異なる。

初版では、執筆の意図が次のように説明されている。

「西洋の教育史を、今日わが国で、推進されつつある、六・三・三制と呼ばれる新しい公教育制度や、その内実をなすいわゆる「新教育」なるものが、その母体と考えられている西洋社会で、どのような経過をたどって、発達してきたものであろうか、ということを中心着眼点にして簡明のべてみようとするのがこの書の意図である。」^{*8}(下線筆者)

つまり、近代西洋における誕生から戦後の日本にいたる教育の展開を、「発達」という視点から把握しようとするものである。いわば、発達史としての教育史である。

一方、改訂版では、本書の課題が次のように書かれている。

「・・・一六世紀以来四百年にわたって世界中を支配し、あるいはリードしてきた西ヨーロッパのゲルマン系国家の指導権は、今やそれらの国ぐにの出世であったアメリカ合衆国を先頭におし立てて、依然として世界の、少なくとも半分をリードしているといっている。このゲルマン系諸国家による四百年にわたる世界支配の歴史の一側面としての教育史をしらべてみるのが、本書の主要な課題である。」^{*9}

ここでは、教育史の展開を楽観的に「発達」として見るのではなく、ヨーロッパの「ゲルマン系諸国家」による教育上の「支配」がどのような性格のものであり、どのような問題をはらんで今日にいたっているものであるかを明らかにする。いわば、問題史としての教育史である。

(2) 対象国と時期

本書で取り上げられる国は、初版では、「今日世界の文化や教育の上で支配的な影響力を持って」おり、「今日のような教育制度や教育実践を築き上げ」てきたゲルマン諸民族(英・米・仏・独)の教育が中心である^{*10}。改訂版では、「世界の国ぐにが、よかれ、あしかれ、影響を受けてきた」ゲルマン系諸国家(英・仏・独・米)の教育が中心に取り上げられる^{*11}。主な対象国はどちらも英・仏・独・米の4カ国であるが、それらの修飾語に、上記の課題意識の違いを読み取ることができる。

本書が対象とする時期は、初版では、カール大帝の時代から新教育運動期まで(1940年代まで)である。改訂版では、ゲルマン諸王の文教政策から米ソ二大陣営の対立期まで(1950年代末)というように幾分拡大されている。

(3) 内容構成

本書の内容は、初版、改訂版ともに、第一に「教育の制度や実際の歴史」であり、それとの関連において「思想」にふれるというかたちになっている。つまり、制度史と実践史が中心で、思想史が補足的に論じられる。

ただし、課題意識の変化を反映して、改訂版では大幅な加筆修正がなされている。それにより、「とにかく改訂版は、ほとんど全面的な書き直しとなり、旧版の文章がほぼそのまま温存されている頁はほとんどないという結果になった。」^{*12}

そのことは実際に章構成を比較してみるとよくわかる。

表1 『西洋教育史』初版（1952年）の章構成

はしがき
第1章 カール大帝
第2章 中世都市
第3章 ルネッサンス
第4章 宗教改革
第1節 ルーテル派の改革
第2節 カルヴァン派の改革
第3節 カトリック諸国の教育
第5章 絶対主義と市民革命
第1節 貴族教育と庶民教育
第2節 民主的国民教育制度の構想
第3節 近代教育学の礎石
第6章 産業革命
第1節 産業革命と教育問題
第2節 義務教育制度
第3節 教育学の発達
第7章 現代社会
第1節 統一学校問題
第2節 中等教育の拡大
第3節 新教育運動
年表
索引

第2節 社会主義と統一学校
第8章 ファシズムと教育
第1節 ナチスの教育政策
第2節 イタリアーその他のファシズム教育
第9章 二大陣営の対立と教育
第1節 社会主義諸国の教育改革
第2節 資本主義諸国の教育改革
付 参考書について
索引

両書の章構成を見て分かる通り、まず章の数が全6章（初版）から全8章（改訂版）に増えている。各章の内容を見てみると、初版の第3章「ルネッサンス」と第4章「宗教改革」の2つの章が改訂版では第3章「絶対主義国家の教育」にまとめられている。また、初版の第7章「現代社会」が改訂版では第6章「帝国主義諸国の教育政策と教育運動」、第7章「社会主義政権の成立と教育改革」、第8章「ファシズムと教育」、第9章「二大陣営の対立と教育」に大幅に拡張されている。

その他の内容に関しては、参考書、図版、年表の扱い方に違いが見られる。参考書については、初版では各章末に参考書（47点）が紹介されたうえで、巻末にも全編を通じての通史的な参考書（7点）が掲載されている。改訂版では巻末に参考書一覧が設けられ、そのなかで通史（9点）と各章ごとの参考書（147点）が掲載されている。参考書の合計は、初版54点に対して改訂版147点と約3倍となっており、その充実ぶりが際立つ。

他方で、図版と年表に関して言えば、初版では図版が18点で、37頁にわたる「西洋近世教育史略年表」が附録として掲載されている。改訂版では図版、年表ともにすべて削除されている。

索引については、初版、改訂版ともに事項索引と人名索引が設けられている。項目数が初版（事項341、人名199、計540）から改訂版（事項404、人名166、計570）に増えていることは、改訂版では第7～9章を中心に内容がより充実したことを示していると言えよう。

V. (西洋) 教育史教育の実際

梅根自身が『西洋教育史』を大学の講義等で実際にどう用いたかは、今のところ不明である。しかし、彼が大学でどのような教育史教育をおこなっていたのか、いくつかの資料から推察可能である。ここでは東京教育大学での最初の講義と、和光大学での教育の様子を確認しておきたい。

(1) 初期の講義

1949（昭和24）年に東京教育大学の教授となった梅根が最初に担当した授業の一つは、学部1年次生対象の専門科目「西洋教育史」であった。テーマは「西洋近世教

表2 『西洋教育史』改訂版（1963年）の章構成

はしがき
第1章 ゲルマン諸王の文教政策
第2章 中世都市の発達と教育
第3章 絶対主義国家の教育
第1節 絶対君主とヒューマニズム
第2節 宗教改革と義務教育制度
第3節 「教授学者」の活動
第4節 プロイセン王国の教育政策
第5節 慈善学校運動
第4章 市民革命と民衆教育
第1節 紳士教育論から民衆教育論へ
第2節 アメリカ合衆国の独立と民衆教育
第3節 フランス革命議会における教育改革論とナポレオン学制
第4節 プロイセン改革と教育
第5節 「教育学」の時代
第5章 産業革命と公教育制度
第1節 産業革命期の教育問題
第2節 イギリスにおける年少労働問題と義務教育制度
第3節 アメリカにおける産業革命と公教育制度
第4節 フランスにおける公教育政策の推移
第5節 プロイセンにおける公教育政策の推移
第6章 帝国主義諸国の教育政策と教育運動
第1節 帝国主義と科学・技術教育政策
第2節 社会政策と教育
第3節 中等教育の拡大
第4節 新教育運動
第7章 社会主義政権の成立と教育改革
第1節 社会主義政権と統一学校

育史概説（普通教育の発達を主題として」。梅根は講義ノート一学期分程度はあらかじめ作成したうえで講義に臨んだ¹³。学生には、お茶の水女子大学前の田畑孔版屋で作成してもらった4分冊から成るガリ版刷りの資料が配付された¹⁴。受講生は1950（昭和25）年は18名であった。

講義スタイルについては、1950（昭和25）年春に東京教育大学に入学した志村鏡一郎によれば、一期生から二期生に以下のような伝達事項が申し送られたという。

「教育学を専攻するつもりのもは、たぶん、『西洋教育史』を聴くだけでも、梅根さんの講義のときには、教室の窓側の机の、前から一列目、二列目、三列目ぐらいのところには、まず座らないほうがいいぞ。梅根さんは、教室全体を見わたしながら講義をしないし、と言って、テキストとかノートとかだけを見て講義するのでもなく、およそ、窓側の机の、前列のあたりを見つめながら、話してゆくのだから。もし、その辺に座りでもしたら、たとえばつむいて、ノートをとってばかりいるとしても、あの大きな目が、こちらに据えられているのかと思って・・・。」¹⁵

当時、この講義を受けていた岩崎次男は次のように述懐している。

「そのプリントが現在手もとに残っていますが、それから想像してみますと、それまでほとんど（あるいはまるっきり）教育史の知識もないところに、ラテン語やフランス語やドイツ語などの史料の引用が豊富なテキストでの先生の講義には、どれだけの理解をもたせようか。先生の講義は、私たちが一応教育史に関するごく一般的な認識もっている、あるいはもっているべきだとその前提の下に進められたフシがあります。高等師範で一応の教育史の知識を得、さらに文理大で研究的に深めるといった手順が教育大にも適用されたのではなかろうか、あるいは専門に関するごく一般的な知識は自力で得ておくべきだと先生は考えられたのではなかろうか。先生の講義が、これまで私たちの受けてきたそれよりも一段と難解であり、質的に全く異なっていたことは、たしかです。それでもかなり沢山の友人が聴講していましたので、私は衆をたのんで安閑と聴講することができたようです。」¹⁶

同じく受講生であった志村鏡一郎も、岩崎と同様に梅根の難解な授業について、こう述べている。

「しかし、それ（ガリ版刷り：筆者）を手にして思

いだされてきますのは、まったく残念というよりほかないのですが、梅根先生がしばしば紹介してくださった、まだ中世の名残りととどめた英文など（独文・ラテン語はもちろんです）、わたしどもの語学力ではどうてい歯のたつものでなく、率直のところ、なにもかもチンプンカンプンだった、ということです。」¹⁷

こうした回想を読む限りでは、学部1年次生には相当難解な内容の授業をおこなっていたようである。本講義の内容は、その後の教育大学講座の『西洋教育史』（1950（昭和25）所収論文「西洋教育史概説—西洋近代学校の成立史—」や、教職教養シリーズの『西洋教育史』に流れ込んでいった。

（2）晩年の講義

梅根は1966（昭和41）年に和光大学学長に就任して以降も、「兼任教授として授業をする権利と義務がある」として、3つの授業を担当し続けた¹⁸。

一つめは「教育学」という学部1・2年次生用の講義で、教育史的内容であったという。テーマは、中教審答申や日教組教育制度検討委員会報告を読んだうえで、レポート作成のための予備知識として、明治以来の日本の教育制度、教育内容の歴史について講述した。レポート課題は、「次の三つのテーマのどれか一つを選び、その選んだテーマについて、各自の居住地の学校で、どんなことが行なわれたか、調査して報告する。もちろん調査結果についての所見をそえる。」というもので、選択テーマは、①明治19年の森文相による学制改革はそれぞれの地方、学校でどのようにうけとめられ、実施されたか、②大正デモクラシー期の教育改革運動の、それぞれの地域、先進的な学校での実施、③戦後改革は、地域、学校でどのように行なわれたか、であった。

レポート課題のねらいは、「郷里の学校を訪問して資料をさがし、リポーターとして活動した人たちをさがし出して、聞きとりをするなど、足をつかい自分の眼と耳でデータをとり、今まで出版された本などには書いていない、なまの事実をほり出すこと」¹⁹であった。受講生は150名内外いたが、梅根はレポートを一つ一つ読んで批評をつけて返却した。

梅根が担当した2つめの授業は、学部2年次生対象の「教育史」であった。テーマは古代ギリシャから現代までの教育思想で、テキストには自分の著書ではなく、村山貞雄他編『原典教育学』を用いた。講義スタイルは、テキストにある教育思想家の著書から「いくつかをとり上げて、その人物についての解説、テキストの講読、若干の質疑・討論といった風の、原典講読的なやや平凡な授業」であったと梅根自身は述べている。レポート課題

は、「テキストに出てくる人物のうち一人を選んで、その伝記、思想、著作、日本で刊行された訳書、研究書などをまとめ、かつテキストに出ている著作の全文（邦訳でよい）を熟読し、それについて読後感を書くこと」であった。受講生数は多い年で12、3名、少ない年で7、8名であったという²⁰。

三つめは、学部3・4年次生対象の「後期ゼミ」であった。テーマはペスタロッチ研究で、1972（昭和47）年は『隠者の夕暮』、1973（昭和48）は『わが祖国の自由について』を取り上げた。ゼミのスタイルは毎年ペスタロッチの作品のうちどれか一つを選んで、学生と輪読しながら、解説および議論をするという「いわば平凡な、旧式のゼミ」であった。訳本中心で必要に応じて原典にあたるという方法であったという。受講生は毎年3～4名で、教員や東京教育大学院生のゲスト参加もあった²¹。

梅根はこれら3つの授業を構造的に捉え、「私のつもりでは一貫したもので、いわばピラミッド型、富士山型のつもりである」²²と考えていた。

VI. (西洋)教育史教育の意義・目的についての考え

(1) 教師が教育史を学ぶということ

教師を目指す者のために教育史のテキストを執筆し、大学の授業で教育史を講じていた梅根は、教育史教育の意義や目的をどのように考えていたのだろうか。

研究史研究の時期区分では第3期にあたる1954（昭和29）年に、「教師と教育史（第一回）」という文章を書いている。そのなかで教師が「問題史的立場（態度）」から教育史を学ぶことの重要性を力説している。

梅根によれば、「過去の珍しい事実を、しかも忘れられ、埋もれている事実を、いろいろの史料によって科学的方法にもとずいてあらわにしてゆく仕事」が歴史学だとすれば、それは「単に物ずきの道楽にすぎず、人々の好奇心を満足させるだけの役割を果すにすぎない」²³。

現実の教育に向き合う研究の一つには、「発展史」や「発達史」と呼ばれるものがある。それは、「ある問題、ある事柄について、それが今日ではかなり理想に近いところまで来ている、しかもまだまだこれからそれを一層理想に近づけなければならない、というような態度に立って、それが今日のようなところまで来たいきさつ、その間における人々の苦心と努力などを明らかにして、先人の努力に感謝し、そこから将来更にそれをうけついで発達させてゆこうとする意欲や情熱をふるい起こさせようと意図するものが多い」²⁴。しかし、発達史的研究には、「その掲げる理想そのものが根本的に問題であるばかりでなく、しばしば『問題』を逸し去って、抽象的な『発達』にのみ着目する危険がある」²⁵。

それに対して梅根が求めるのは、問題史的研究である。「現在の—従って未来への眼をつけての—問題意識に導

かれて、過去の社会的事象の変化のあとを追求するような歴史研究を、われわれは広く問題史的研究を呼ぶことができるであろう。そしてすべて歴史というものは、この意味での問題史であるべきだということ、従って教育史もまた当然そうだ、という主張に対しては、大ていの人々が異論をさしはさまないであろう。」²⁶ 問題史的研究とは、例えば、日本の大学受験競争の激化による教育のゆがみという問題があったとする。その時に、古く入学試験の歴史的变化をたどり、入学競争がはげしくなってきた原因と事情を究明することを通して、今日の問題を解決するためになすべきことの見通しを得るような研究である。梅根は、「教育史というものはおよそこのような問題史的態度にみちびかれて研究もし、また読むべきものであると思うのである。」²⁷と述べる。「教育者が教育の歴史を学ぶということは、このような問題史的立場においてでなければならない」²⁸というのである。

第4期になると、教師が教育史を学ぶことの意義についても、問題史的立場がより鮮明に意識される。そのことを1959（昭和34）年の『西洋教育史—民衆教育のあゆみ—』の「はしがき」に見て取ることができる。梅根は、教育史の学習が「歴史上の偉大な教育思想家や教育者の思想や行動に学び、その教えを受けるといって程の意味で大切」²⁹（P.1）とされていた時代ではもはやなくなっているという危機感をもって、次のように述べている。

「日本だけについて言えば、今日わが国の教育界は一つの大きな転機というか、或は危機に立たされている。どんな教育をしたらいいかということについて教師は重大な決断を迫られているといってもいい。そうした時に教師の決断の重要な手がかりとなるのは、世界の教育は歴史的にどう動いてきたか、どう動こうとしているのか、教育を動かしてきたものは何であったか、を見定める歴史認識である。このような歴史認識に立って教師ははじめて、自分の決断とそれにもとづく教育実践を、歴史の流れの中に正しく位置づけ、確信ある意志決定と実践にふみ出すことができるであろう。」³⁰

このように教育史を学ぶことで、教師が世界の教育の動きを見定める歴史認識を獲得し、その上で教師が確信を持って意思決定と実践をおこなえることが重要であると梅根は考える。そのうえで、教育史のなかでもなぜ西洋教育史かという問いに対しては、「西洋教育史はわれわれにとって外国の歴史であるけれども、それは単なる外国の歴史としてではなく、人類の教育史をいわば典型的に示すものとして、世界教育史の主要教材としての意味をもっている。その意味で西洋教育史を学ぶことには、大きな価値がみとめられなければならない」³¹と述べる

のである。

Ⅶ. おわりに—今『西洋教育史』をどう用いるか—

『西洋教育史』の成立と改訂を概観して言えることは、本書がすぐれて時代の産物だということである。本書の初版が出版されてから70年以上の歳月がながれた現在、西洋教育史研究の水準は格段に高まり、新しい資料や視点に基づく膨大な研究成果が国内外で発表されている。そうしたことを考えるならば、今日われわれが本書を西洋教育史のスタンダードな入門書として学生に示すというのは困難である。

では本書をどう用いることができるだろうか。筆者は次の点、すなわち、本書が著者の個性を押し殺して教育史の基礎知識を羅列したような教科書風の概説ではなく、梅根という強烈な人格が当時の教育状況や社会状況と対峙するなかで自己の感情や主張を込めて書き上げた著作であるという点にこそ、本書を今日読み直す意義があると考え。つまり、そうした本書の性格を踏まえ、『西洋教育史』の成立と改訂を、梅根の思想展開や戦後の教育制度と社会状況との関わりにおいて読み解く作業とおして、教育の理論と実践の関係、政治と教育の関係等について考察するための題材・資料にするということである。

本書に見ることのできる「問題史としての教育史」という梅根の考えは、その後、教育史学会のシンポジウムでも繰り返しその重要性が指摘されてきたように³²、今日多くの教育史研究者に受け継がれ広まっていると言えよう。梅根の生きた時代に比べ、教育や社会の対立軸が複雑化・多元化している現代、問題史の基点となる「問題」をどのように見だしていくかも多様化していることを自覚しつつ、現実の教育政策や教育実践に建設的に関与していくための教育・研究の基本姿勢として、この「問題史としての教育史」という考え方は、今日ますます求められているように思われる。

註

- *1 中野光「梅根悟」、「桐花爛漫—筑波大学131年人物列伝—」編集委員会編『桐花爛漫—筑波大学131年人物列伝』2003年、p.109。
- *2 教育哲学会では、学会の研究プロジェクトとして「戦後教育哲学の出版」（2007～2009年）が設定され、村井実と上田薫の回顧録がまとめられた。
- *3 中野光「『物語そしての教育史』研究—戦後日本の教育学におけるひとつの軌跡—」、中野光『戦間期教育への史的接近』E X P、2000年。中野光「梅根悟とペスタロッチー」、中野光『日本のペスタロッチーたち』つなん出版、2005年。古沢常雄「梅根悟の教育史

- 学」、教育史学会編『教育史研究の最前線』日本図書センター、2007年。
- *4 梅根悟／教育史研究会編『教育研究五十年の歩み』講談社、1973年、p.170。
- *5 以下の文献より筆者作成。浜田陽太郎編『ながれ—梅根悟先生還暦記念—』東京法令出版、1963年。「梅根悟博士 略年譜」、教育史学会編『日本の教育史学』第23集、1980年。
- *6 梅根悟「学問と私の遍歴」、梅根悟『小さな実験大学』講談社、1975年、p.222-229。
- *7 中野光「『物語そしての教育史』研究—戦後日本の教育学におけるひとつの軌跡—」、中野光『戦間期教育への史的接近』E X P、2000年、p.333。
- *8 梅根悟『西洋教育史』（教職教養シリーズ）誠文堂新光社、1952年、p.1。下線筆者、以下同じ。
- *9 梅根悟『西洋教育史』（新・教職教養シリーズ）誠文堂新光社、1963年、p.2。
- *10 梅根悟『西洋教育史』（教職教養シリーズ）、前掲書、p.2。
- *11 梅根悟『西洋教育史』（新・教職教養シリーズ）前掲書、p.2。
- *12 同上書、はしがき、p.2。
- *13 ノートは和光大学附属梅根悟記念図書館に所蔵されている。ノートの右頁には講義内容が几帳面な文字でほぼ完成原稿かたちで文章化されており、左頁に補足メモが書かれている。
- *14 志村鏡一郎「梅根先生と私」、浜名陽太郎編『ながれ』前掲書、p.111-112。
- *15 同上書、p.111。
- *16 岩崎次男「梅根先生と私」、浜田陽太郎編『ながれ』前掲書、p.72-73。
- *17 志村鏡一郎「梅根先生と私」、浜名陽太郎編『ながれ』前掲書、p.111。
- *18 梅根悟「私の授業」、梅根悟『小さな実験大学』講談社、1975年、p.217。
- *19 同上書、p.219。
- *20 同上書、p.291-220。
- *21 同上書、p.221。
- *22 同上。
- *23 梅根悟「教師と教育史（第一回）」、『学校時報』4巻12号、1954年、p.4。
- *24 同上書、p.5。
- *25 同上書、p.6。
- *26 同上書、p.4-5。
- *27 同上書、p.5。
- *28 同上書、p.7。
- *29 梅根悟『西洋教育史—民衆教育のあゆみ—』黎明書房、1959年、p.1。

- *30 同上。
- *31 同上。
- *32 教育史学会大会シンポジウム「教員養成のための教育史教育の問題点」（第18回）、「私の教育史教育－教育内容の構成について－」（第20回）、「教育史的認識をいかに形成するか」（第21回）、「教育史教育と研究のあり方をめぐって」（第37回）等。

主要参考文献

- ・教育史学会第18回大会記録「シンポジウム：教員養成のための教育史教育の問題点」、教育史学会編『日本の教育史学』第18集、1975年。
- ・教育史学会第20回大会記録「シンポジウム：私の教育史教育－教育内容の構成について－」、教育史学会編『日本の教育史学』第20集、1977年。
- ・教育史学会第21回大会記録「シンポジウム：教育史的認識をいかに形成するか」、教育史学会編『日本の教育史学』第21集、1978年。
- ・教育史学会第37回大会記録「シンポジウム：教育史教育と研究のあり方をめぐって」、教育史学会編『日本の教育史学』第37集、1994年。
- ・梅根悟「西洋教育史概説1－西洋近代学校の成立史－」、東京教育大学教育学研究室編『教育大学講座4 西洋教育史』金子書房、1950年。
- ・梅根悟『西洋教育史』（教職教養シリーズ）誠文堂新光社、1952年。
- ・梅根悟「教師と教育史（第一回、第二回、最終回）」、『学校時報』、4巻12号、5巻1－2号、1954～55年。
- ・梅根悟『世界教育史－人間は人間を幸福にできるその考え方の歴史－』光文社、1955年。
- ・梅根悟編『西洋教育史－民衆教育のあゆみ－』黎明書房、1959年。
- ・梅根悟『西洋教育史』（新・教職教養シリーズ）誠文堂新光社、1963年。
- ・梅根先生の退官を記念し新出書を祝う会編『ある教育者の遍歴』誠文堂新光社、1966年。
- ・梅根悟『西洋教育思想史（1～3）』誠文堂新光社、1968～1969年。
- ・梅根悟／教育史研究会編『教育研究五十年の歩み』講談社、1973年。
- ・梅根悟「私の教育学研究」、日本教育学会編『教育学研究』第40巻、第4号、1973年。
- ・梅根悟『小さな実験大学』講談社、1975年。
- ・梅根悟『教育断層 歴史に生きる』あゆみ出版、1982年。
- ・「梅根悟博士 略年譜」、教育史学会編『日本の教育史学』第23集、1980年。
- ・中野光『日本の教師と子ども』EXP、2000年 a。
- ・中野光『戦間期教育への史的接近』EXP、2000年 b。
- ・中野光「梅根悟」、「桐花爛漫－筑波大学131年人物列伝－」編集委員会編『桐花爛漫－筑波大学131年人物列伝』2003年。
- ・中野光『日本のベスタロッチーたち』つなん出版、2005年
- ・浜田陽太郎編『ながれ－梅根悟先生還暦記念－』東京法令出版、1963年。
- ・古沢常雄「梅根悟の教育史学」、教育史学会編『教育史研究の最前線』日本図書センター、2007年。
- ・和光大学附属梅根記念図書館編『梅根悟著作目録』和光大学、1984年。
- ・和光大学附属梅根記念図書館編『梅根悟寄贈図書目録』和光大学、1985年。

謝辞：梅根悟関係の文献・資料の閲覧に際しては、和光大学附属梅根記念図書館職員の方々に大変お世話になった。記して御礼申し上げたい。

付記：本研究は、2003（平成15）年12月13日に筑波大学学校教育学部で開催された「梅根悟博士生誕100年記念シンポジウム」における報告「梅根悟と教育史教育－『西洋教育史』（教職教養シリーズ）をどう用いるか－」をもとに加筆修正したものである。また本研究は、平成24～26年度科学研究費補助金萌芽的研究「梅根悟における新教育観の形成と転換－戦後新教育の思想史的研究－」（研究課題番号24653228）による研究成果の一部である。